



学校事例 ③

関東甲信越 地区

群馬県 前橋市立岩神小学校

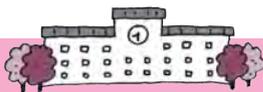
全ての教育活動で「工夫 「役立つ自分」 「感謝」があふれる学校に

どんな大人になってほしいか



- 自分たちが生きていけるのは当たり前のことではなく、この地域や周囲の人々がいるからだと考え、人と人とのつながりを大切にし、感謝の気持ちを持てる人
- 理想や夢を諦めない人

そのための小学校の役割



- 周囲への感謝の気持ちを育むこと
- この地域で育ってよかった、この地域があるから生きていける、という基盤を感じられるようにすること
- 自分ができることを見つけて、自己有用感を持ち、臆することなく実践する姿勢を育むこと

未来に残したい 岩神小学校の力強さ

- ◎ 持てる力を自ら発揮しようとしめない子どもたちの状況の改善には、子どもが自己有用感を高める場を大人が意図的につくる必要があると考え、全ての教育活動で子どもが「役立つ自分」を感じられるような指導を行っている
- ◎ 学校内にとどまらず、保護者やPTAなどとも、学校の思いや取り組みを共有。学校を、保護者や地域全体と、「ありがとう」と伝え合い、気持ちを交流し合う場としている



前橋市立岩神小学校
山口良枝 Yamaguchi Yoshie

研修主任、1学年主任。「自分を大事にすると共に、周囲の人も大事にする子どもを育てたい」



前橋市立岩神小学校
小島映子 Kojima Eiko

教務主任。「人と人とのつながりを大切にしながら、子どもたちに思いやりの心を育てていきたい」



前橋市立岩神小学校教頭
飯野隆宏 Iino Takahiro

「子どもも教職員も保護者も地域の方も、皆が『行きたい』『協力したい』と心から思う学校を創造したい」



前橋市立岩神小学校校長
塩崎政江 Shozaki Masae

「『どうせやるなら楽しくやろう！』が合い言葉。分かりやすい言葉で学校づくりをしていきたい」

School Data

設立	1953(昭和28)年
校長	塩崎政江先生
児童数	404人
学級数	16学級(うち特別支援学級2)
所在地	〒371-0035 群馬県前橋市岩神町4-4-1
TEL	027-231-6162
URL	http://menet.ed.jp/iwagami-es/
公開研究会	2011年11月8日(火)



「役立つ自分」を感じて 積極的に力を発揮してほしい

前橋市立岩神小学校は、前橋市の中心部にほど近い住宅街に位置する。子どもは総じて活発だが、自己有用感の低さが課題だったと塩崎政江校長は話す。

「3年前に本校へ赴任した時、力はあるのに出し切れていない、あるいは自分から発揮しようとしていない子どもが多いと感じました。しかし、それは子どものせいではなく、むしろ子どもが自信を深めたり、自己有用感を高めたりする場を十分に用意できていない大人に責任があるのではないかと考えました。今の社会では、家族や学校の一員として、子どもが試行錯誤しながら力を発揮する場を、大人が意図的につくっていく必要があると思います」

飯野隆宏教頭も子どもの様子をこう話す。

「失敗を恐れて積極的に挑戦しなかったり、勇気を出して挑戦しても周囲に認められないと必要以上に落ち込んでしまったりする子どもが目につきました」

こうした状況を踏まえ、同校は2010年度から「役立つ自分」を目指して取り組む児童の育成」を研究主題に取り組みを進めている。研修主任の山口良枝先生は次のように説明する。

「自分が大切な存在だと感じられなければ、自分を出し切ることは出来ません。いろいろな活動を通じて、子どもが人のために『役立つ』

経験をすることで、自己有用感が高まり、自信が付きやすくなります。その結果、物事に積極的に取り組むようになるのではないかと考えました。このようになれば、自分も、家族や地域、友だちなど、周囲の人に支えられていることに気付き、人の大切さやありがたさを感じられると思うのです」

学校づくりの方針は「みんなが楽しい岩神小」であり、次のような思いが込められている。

「本校の目指す『楽しさ』は、『人の役に立っているという楽しさ』です。人にありがとうと言いたい、人からありがとうと言われたい、そんな子どもを育みたいと思います」（塩崎校長）

小さな成長を見逃さず 子どもに伝える

同校では、教育活動のあらゆる場面で「役立つ自分」が意識されている。

普段の授業では、「役立つ自分」「みんなのかけ」という思いが土台となっている。子どもが間違えて発言しても、教師は「それは違うよ」とは言わずに、「あなたが発言してくれたから、みんなが考えるきっかけが生まれた」と授業を進める。教師の言葉が少し違うだけで、「発言してくれてありがとう」という気持ちを自然に持て、授業中の発言にも積極的になれる。

「授業でも、『出来た』『うれしい』『伝えたい』という気持ちがあれば、子どもは学びに向かいません。教師が一方的に『良い授業』を考え

てつくり込むのではなく、子どもがどう受け止めているかをしっかり見取り、授業づくりを進めることが大切だと考えています」（塩崎校長）

高学年においては、家庭科を中心に取り組みを進めている。教務主任の小島映子先生は次のように語る。

「家庭科は、学びを家庭生活や家族のために生かすのに最適な教科です。5年生から6年生にかけて、調理や裁縫など自分の出来ることを増やし、それを家族、家庭生活に生かすことによつて役立ちを感じる場面をつくる事が出来ます。家族の役に立ってうれしいと感じること、『またやろう』という意欲が生まれるのです」

授業以外の場面では、感謝の心と役立ち感、自分の行為が喜ばれることのうれしさを感じられるように、子どもへの働き掛けを工夫する。

「なかよしタイム」を例に見てみよう。これは、1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生という組み合わせで、月1回、朝の時間にドッジボールなどをして一緒に遊ぶ異学年交流の時間だ。上級生と下級生がペアとなり、1年間、活動を共にする。すると、普段の休み時間でも、6年生が1年生の教室に行き、一緒に遊ぶようになるという。こうした光景は以前から日常的に見られたが、「役立つ自分」をテーマに研究を始めてから変わったのは、教師の子どもへの声掛けだ。

「かつて、下級生には、上級生に来てもらうことを当たり前だと受け止めている面が見られ

ました。しかし、例えば、教師が1年生に『6年生が来てくれてよかったね』などと意図的に声を掛け続けたことで、『お兄ちゃん、お姉ちゃんがわざわざ来てくれる』と意識し、感謝するようになりました。一方、上級生に目を向けると、同年年の友だちだけで活動する場面ではあまり意欲的でない子どもが、下級生と活動する時にはリードする姿を見せる場合もあります。教師はそうした小さな変化を見逃さず、褒めることを大切にしています」（山口先生）

毎年6月頃に5〜6年生が行うプール清掃でも、11年度は一工夫した。掃除の様子を撮影し、全校児童の前で紹介したのだ。それを見た1〜4年生は自然とその場で感謝を伝えた。5〜6年生はうれしそうなる表情を見せたという。

小島先生は、少し気付きを促すだけで子どもたちの意識は大きく変わると話す。

「プールがどのようにしてきれいになったのかを伝えなければ、下級生には分かりません。5〜6年生も下級生に感謝され、より一層自分が役に立ったと感じていました」

全校児童が地域に出て掃除をする「公道清掃」では、学校とは違う気付きを促せる場面もある。11年6月に6年生が公園を掃除しに行ったところ、ごみあまり落ちていなかった。2日前に地域の人たちが清掃したからだった。

「ただごみを拾えばよいのではなく、普段、公園がきれいなのは地域の人々が掃除をしてく

れているからだ、子どもが気付くような指導が大切です。そうすれば、子どもにも地域のために頑張ろうという意識が芽生えます」（小島先生）

1年生は安全上の理由から校庭の石拾いを担当。初めて「役立つ喜び」を感じる機会でもあった。

「子どもたちと『この石を拾ったら、みんなが転ぶ

にくくなるね』と言いなながら作業をしました。入学してから上級生にしてもらってばかりだった自分たちが役立てる、その喜びが活動への意欲の源となりました」（山口先生）

入学後2か月でこのように考える1年生が育つ背景には、「上級生にこんないろいろなしてもらったね。今日はみんながお返しできるね」と語り掛けている教師の指導がある。

「役立つ自分」の取り組みのポイントを、塩崎校長は次のように話す。

「まず、子どもが力を発揮できる環境をつくること。そして、教師が『家族や友だち、地域の人々、いろいろな人がみんなのために頑張っているよ』と伝えることです。『みんなが自分のためにしてくれている』と気付けば、『自分もその人たちのために頑張ろう』と思います。

図 プレゼント作りのワークシート

家庭科で学習したことを生かして家族に感謝の気持ちを伝えよう	
布を使って作成し、プレゼントしよう	
だれ 母	どんなもの ハンカチ
をプレゼントしたいな	
プレゼントしたいわけ・・・ 母の仕事帰りに行くときと暮らして おきたいにふりかかっているおまじ かじだすのわかんどうぶつがでこ 子がまるといいと思ふおがだす	
出来上がり図 	このプレゼントを使ってもらって どんな気持ちになってもいいです です。 便利に「なま」が「ま」 たなと「なま」が「ま」 小い「なま」

他にも、プレゼントをもらった保護者の気持ちを書いてもらうワークシートも作成。親子の気持ちを交流できる
*同校の資料をそのまま掲載

「ありがとう」の気持ちを 交流させるきっかけをつくる

そして、頑張っている姿をしっかりと見取り、褒めることです。その際、担任以外の先生から褒められるのはうれしいものです。学級を超えて子どもをよく見ることが重要だと思えます」

「役立つ自分」への取り組みでは、家庭科や学校行事、地域活動など、6年間の流れが系統立てて整理され、模造紙で校内に掲示されている。感謝の気持ちを自由に書く「ありがとう短冊」も、校長室の前に所狭しと貼られている。

「校内に掲示することで、1〜6年生の取り組みがどう結び付いているのか、根底にはどんな思いがあるのか、教師はもちろん、子どもや保護者に共有しやすくなります」（小島先生）

取り組みの総まとめといえる「感謝の気持ちを伝えよう」の活動の一つは、6年生の2学期後半に家庭科で行う家族へのプレゼント作りだ。小島先生が作成したワークシート(図)は、

「だれにどんなものをプレゼントしたいか、それはなぜか」「プレゼントでどんな気持ちになってもらいたいか」などの項目により、感謝の気持ちを伝えられるようになっていく。教師は「この子が家族に対してこんな思いを持っているのか」と、普段とは違う一面を発見するという。

「親も子も、日常で改まって感謝の気持ちを伝える機会は少ないと思います。『してもらってうれしい』『してよかった』という気持ちを交流させるきっかけを学校がつくれたらと思いい、ワークシートも考えました」(小島先生)

プレゼント作りの授業には学習支援ボランティアが入る。多くは児童の母親だ。

「ボランティアの皆さんも、楽しんで授業に参加しています。子どもの役に立つ喜びがあるからだと思います」(塩崎校長)

役立つ喜びと感謝の気持ちの輪は、PTA活動にも広がっている。PTA会報の特集として『役立つ自分』をめざして」が生まれ、PTA主催「親子清掃ボランティア」(年2回)の参加者は例年以上に多かった。保護者からは「子どもが毎日通う学校をきれいに出来てよかった」という声が寄せられた。感謝の言葉を伝える機会が格段に増え、学校全体に「役立つこととの素晴らしさ、うれしさ」が広がりつつある。



育てたい大人像と
そのための小学校の役割
周りへの感謝を忘れず
夢を諦めない大人に

子どもへの思いを、塩崎校長は次のように語る。

「今は、比較的、何でも手に入る豊かな時代です。しかし、10年後、20年後の社会は、むしろ『豊かさ』は当たり前ではないでしょうか。

だからこそ、今自分がいるのは当たり前ではなく、この地域や周囲の人々がいるから生きていけると考え、人と人とのつながりを大切にすると、感謝の気持ちを持つ人になってほしいと思います。本格的な思春期に入る前の小学校時代に、周囲への感謝の気持ちや、この地域で育ってよかったという基盤を感じられることが重要だと思っています。この基盤があれば、世界中どこへ行っても自信を持って生きていけると思うのです」

飯野教頭も言葉を続ける。

「子どもには、理想や夢を諦めない大人になってほしいと思います。そのために、自分が出来ることを見つけて臆することなく実践する姿勢を育みながら、世界に目を向けて将来の夢を設計し、それを語ったり図や絵で表現したりできる教育課程を考えられればと思います」

同校の職員室の机には、塩崎校長が書いたメモがよく置かれている。「今日、Aくんがこん

な良いことをしていました」といった内容だ。

「私が教室で『今日、校長先生が褒めていた子がこのクラスにいます』と伝えると、子どもたちは大喜びします。『1年1組はこうだね』とおおまかに褒めるのではなく、一人ひとりの子どもがどのように育っているのかをつぶさに見て、具体的に褒めることが重要なのだと感じています」(山口先生)

塩崎校長は幼稚園教諭と園長を務めた経験があり、その時と同様に人数が多くなっても子どもの名前と顔は全員一致するようにしている。

「校長の仕事の一つは子どもの良さを皆に伝えることです。良いことはすぐに伝えたいのでメモを置きます。これは先生方にも言えることで、どの先生にも良いところがあります。それを引き出して皆に伝えるのが、私の役割です」(塩崎校長)

職員会議が終わるのは午後4時だが、そこから1時間、教師の情報交換が続くのが恒例だ。困ったことがあれば、一人で抱え込まずに周りに相談できる雰囲気があるからだ。

「理想の上司ともいえる塩崎校長の下で、とにかく自分が実践して、子どもたちや先生方と共に進もうと考えています」という飯野教頭の言葉からも、学校の一体感が伝わってくる。

「問題を抱えていても、皆に相談すれば何とかなると思えるのが本校の強みです。これからも『子どものため』という視点を変えずに研究を続けていきたいと思えます」(山口先生)